



▲猪の形に切り抜かれた板に色つけ作業をするメンバー

「子午線が通るまち但東」を 干支看板でアピール

東経135度の子午線が通る但東町栗尾地区では、地区住民の協力を得て、その特性を生かしたまちづくりが行われています。地域の活性化を目指して区民を引っ張り、「自慢できるところづくり」を展開している男性を紹介します。

西垣 勉さん（74歳）但東町栗尾在住

子午線が通るまちを アピールしたい

但東町栗尾地区の国道426号沿いには、一際目立つ干支看板が立っています。これは、同地区の地域おこしグループ「栗尾ふるさと135委員会」によって立てられたものです。

委員長を務める西垣 勉さんは、「子午線の通るまちをアピールしたくて人に見てもらえるような大きな干支看板を作りました」と話します。同委員会は平成10年に結成。会の名称は同地区の中心部を東経135度の子午線が通ることから命名し、現在、役員8人で運営しています。



▲42年間教師を務めた西垣さん。定年後はふるさと135委員会の委員長のほか、さまざまな地区の役を務め地域に貢献している

この干支看板を設置する以前は、国道の両脇に「子午線の通る地区」と書いた標柱を立てていました。しかし、あまり目立たず、通行するドライバーになかなか気付いてもらえませんでした。

意外に好評 継続に意欲が湧く

そこで、「誰もやっていないような面白いものを作ろう」と平成12年12月、翌年の干支（巳）にちなんで、ごみ袋にすくもを詰めて長さ14メートルもの大蛇を作成したところ、意外にも大好評でした。さらに翌年には、干支の羊を作成し、これもまた人気を集め「これでやめられなくなってしまう

ったんですよ」と同委員会メンバーの藤田直治さん。その後、これを名物看板にしようとの決め、現在では、毎年の恒例行事となっています。

安全運転が亥の！

また、同委員会が作る干支看板は地区のアピールと同時に、交通事故防止を呼びかけ、地域の交通安全にも貢献しています。豊岡と京都府を結ぶ国道426号は、交通量が少ないため、通行する車は速度を出し気味になります。

このため、干支看板を目にした人々から、「せっかくの看板を年末年始だけ飾っておくのはもったいない」との声に同委員会は、毎年、新年を迎えた1月中旬に、干支看板の年号文字を交通安全を呼びかける標語に模様替えするようになっています。同委員会メンバーの兼井通夫さんは、「来年はどんなデザインと標語にしようか考えるとワクワクします」。干支看板は、交通安全にも一役担っています。

みんなの協力があるからこそ続けられる

看板を設置するにも一工夫あります。メンバーの大工職人から強風を受けても倒れないような、さまざまなアドバイスを受けながら制作を進めています。

西垣さんは「絵を描く人、材料を用意する人、看板を取り付ける人など地区住民みんなで取り組んでいます。この理解と協力があるからこそ、干支看板は続けられています。今回の猪で7番目。12支が一回りすれば私は80歳を過ぎてしまいますが、それまではなんとか頑張って続けたいです」と力強く語っています。



▲12月10日には、来年の干支の猪をデザインした看板(縦・横約4メートル)がお披露目された